生きがいのある生活？

統計審議会委員
東京大学教授　中村　隆英

時代は急テンポで変わってゆく。昔から30年一と昔といわれるが，それは一世代を三〇年とみて三〇年たてば世の中の働らき手が全部交代してしまうから，その間に世間が変わってゆく，というほどの意味であろう。しかし，このごろは三〇年たてば世の中が変わる，などとのんびりしたことをいっていられるご時世ではなくなったようである。

むかし，大久保彦左衛門という老武者は，一生，命がけで働らいて，大名にもなれず，口先だけの才子が登用されてゆく世の中に不平満々で「三河物語」を世にのこした。それは天正から寛永にかけての五〇年あまりの世の変遷のためである。長生きしたばかりに，戦国から泰平への二世代をみた彦左衛門が，時代おくれになったのはやむをえないことだったかもしれない。しかし，今は彦左衛門時代どころの話ではない。社会的な変化のテンポはもっとはやくなっている。それにどう対処してゆけばよいのか，あるいはこれから何がおこると考えればよいのか，見通しがつけにくくなっているのである。

変化の例をいくつかあげてみよう。ひとつは，コトバの変化である。若い人の日本語のよみかき能力が，漢字制限やマンガの普及のおかげで下ってゆき，その一方で若い人たちの話しコトバが，いつのまにか書きコトバに変わってくる。それはたんに表現の問題だけではなく，コトバという衣裳をつけたものの考え方の変化にまでつながってくる。このごろ，学生のビラに，慶応大学を慶応大学と書いたのがよく目につく。マダレにKとOを入れたこの字は，何とまあご都合主義なことか。そこには大げさにいえば，既成の権威への反抗があり，ひらたくいえば，面倒な字を書かなくても意味さえ通じればいいじゃないかという国語に対する「甘え」がみられるように思われる。

もう一つの例は最近行なわれた勤労者の意識調査（日本生産性本部『職業と生活に関する意識』）の結果である。そこでみられるのは，若い人の間に職場に対しても，会社に対しても，所属する労働組合に対しても，政治に対しても，自分の生活の意義や将来の設計に対しても，無関心なグループがふえているという事実である。そして，比較的関心のつよい分野を求めれば，それは家族友人とのつながりである。それはいわゆる「豊かな社会」に必然的な人間のタイプなのかもしれない。かれらは職業を求めて苦労する必要はなく，賃金が生活のために不十分だと感ずることもまずない。それは戦後の高い成長の結果なのだが，その成長の結果を自明の前提とし，こんどは自分は何をしたらいいのかわからない世代が社会の多数をしめるようになってきているのである。

このごろ，はやりの「生きがい」論もここから生まれる。価値の多元化といわれるむずかしそうな現象も，かつては生活が第一だ，といっていたのに，いまでは生活がなりたつのを当然として，生き甲斐を考えるから生じたことである。しかも，一方ではマスコミによって情報が洪水のようにアタマの中に流れこみ，若い人たちはますます動揺する。アメリカではやりだしたヒッピーも，日本でも少しづつふえはじめているのではないだろうか。私は大学を出た若い男が，さて就職するのが何となくいやで，ごろごろしている例を何人か知っている。

私はこうした事情を，自分の若い時――戦時戦後の混乱時代とひきくらべて，「今の若い者は」，とお説教をしようとは思わない。お説教をしても白い眼で見られるだけで実効があがらないことは明らかだし，私にも親や先輩に反抗的だった時代もあったのだから。

ただ，時々おもうことは，この変化がのちに何をもたらすのか，ということである。日本もアメリカのような経済的成熟の上にたつ不安定な社会になってゆくのだろうか。時代が早く変わってゆくから，それも仕方がないのかもしれない。

しかし，なげいてばかりいるのが能ではあるまい。これからの日本の社会にとって，もっとも大切なのはこのような若い人たちの変化を見定めることなのである。それによって，これからの社会のありかたや仕組みがきめられてゆくことになるのは否定できない事実だからである。

統計の仕事をするものにとっても，この問題にどうタッチしてゆくかを真剣に考える必要が生じつつあるのではないだろうか。意識調査の手法は，いまのところ開拓がおくれている。労働力の状態などについても，現行の「労働力調査」の方式で十分かどうかは疑問である。産業や職業の就業状態のとらえ方なども，考え直さなくてはいけないかもしれない。すぐに実効がある話ではないけれども，変わってゆく社会のなかでの統計調査のありかたを反省する必要が生じようとしているのである。